



東京多摩プロバスニュース

第 70 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧5-29-10 平田方 ■編集・発行：広報委員会 2017.1.11.

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

豊かなキャリアをこの街に活かそう！

第 149 回 定例会

日 時：平成 28 年 11 月 2 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関戸公民館第 2 学習室

お客様：埼玉浮き城プロバスクラブ元会長渡邊栄一氏他 2 名

出席者：27 名(会員数 34 名)

第 150 回 定例会

日 時：平成 28 年 12 月 7 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：26 名(会員数 34 名)

理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする



ごあいさつ



「新春を迎えて」

明けましておめでとうございます。皆様おそろいで良い年をお迎えのことと存じます。

今年もどうぞよろしくお願いします。

昨年は当クラブが継続している諸活動を地道に改善しながら、6 年振りに「東京多摩プロバスクラブフェア」を開催いたしました。澤雄二地域奉仕委員長が実行委員長をつとめ、京王聖蹟桜ヶ丘店 5 階 AB 館連絡ブリッジを使った当クラブの丹念な活動紹介。そして関戸公民館 7、8 階を使つての「江戸しぐさを今に活かす」の講演など、盛り沢山の行事を行いました。「プロバス

西村政晃副会長



クラブ”というのはまだ必ずしも世間で知られているとは言えないだけに良い PR になったことと思います。

日頃、私達は委員会活動、定例会のあり方などよく議論し、その都度改善が行われています。なかでも定例会は月一回の大事な活動だけに卓話・講話、各種報告、誕生祝など、様々な工夫が凝らされてきています。昼食会を併せて行う定例会も時折実施されています。

各委員会の活動も前例にこだわらず着実な改善が実施されてきました。もとより当クラブの「理念」の四つをどう事業計画に具現化するか、毎年問われるところです。

今年は創立 13 年目を迎えます。

ともすればややマンネリになりやすい年数の経過のようにも思います。あらためて諸活動の改善、レベルアップに取り組みれば、と私自身念じております。

「多摩プロバスかるた」の原画「よこやまの道起点付近」 山田正司会員画



1. 幹事報告

上田清幹事

1.1. 恒例の忘年会が12月7日(水)京王クラブで開催され、多摩ロータリークラブ、八王子・日野プロバスクラブ、からの参加もあって盛大に行われました。

こうした相互交流を通して、各クラブの発展と会員の親睦が図られ意義深いものとなりました。

関連記事P4参照

1.2. プロバス会計の改善に向けて、収支のバランス化を図ることが課題となっています。特に下半期においては事業の見直し等による歳出の削減が急務で、より効果的なクラブ運営に努力をしていく必要があります。

1.3. 多摩ロータリークラブ主催の第12回多摩市中学生俳句大会は、市内10校から約3千句の応募作品が寄せられ、100句が優秀作品として選ばれました。12月17日(土)には永山公民館バルブホールで表彰式が行われ、多摩プロバスクラブからも「プロバス賞」を贈りました。

関連記事P4参照

2. 委員会報告

2.1. 総務委員会

大澤亘委員長

1) 第149回定例会

埼玉浮き城プロバスクラブとの交換卓話として同クラブ渡邊栄一元会長による「忍藩と行田の足袋」と題する講話が行われた。

関連記事P3参照

2) 第150回定例会

鈴木達夫会員による卓話「建設設備と暖房システムの訪欧調査」が行われた。

関連記事P3参照

3) 今後の卓話予定

・第151回定例会(平成29年1月) 元川崎重工業海外営業本部長藤井国男氏「イスラム世界との交流を通して得た体験～イスラム諸国の政治、経済、ビジネス、生活を垣間見て」

・第152回定例会(2月) 多摩市社会福祉協議会 大久保雅司氏「災害時の自助・共助・互助・公助」

・第153回定例会(3月) 小池博会員「電気はとっても切りにくい」

2.2. 研修・親睦委員会

秋山正仁委員長

1) 12月7日(水)定例会後の忘年会は、会員24名来賓9名、計33名参加。

2) 1月20日(金)大相撲初場所の観戦は、参加者24名で締め切った。当日午前11時にオーパ横から29人乗りの



研修・親睦委員会メンバー

レンタカーで出発し、午後0時30分昼食のちゃんこ鍋。午後1時30分江戸東京博物館(戦国時代展)。午後3時頃

から大相撲を観戦。

3) 鎌倉プロバスクラブとの交流会については別途打ち合わせる。

2.3. 地域奉仕委員会

村上伸茲委員長

“東京多摩の湧水についての調査・研究”

多摩丘陵地区は湧水に恵まれています。どのような恩恵を受けているのか。研究報告の発表と、湧水発源地域を歩き、観察したいと考えています。

はじめは、「片倉城跡公園」(八王子)が候補です。

高村会員の長年にわたる研究の苦労話や研究の面白さなど、ためになる話が聞けます。

一方、このプロジェクトにより、大谷戸公園の蛸が大量に光る現象が解明されることを願っています。

参考書: 高村弘毅著「東京湧水」

2.4. 広報委員会

登坂征一郎委員長

1) 会報第70号の発行・配布; 平成29年1月11日(水)

会員各位の趣味・紀行・我が故郷・対外活動などを中心に、会員の相互の交流を深める誌面作りに寄稿を期待しております。

2) ホームページの更新; 平成29年1月20日予定

3. 全日本プロバス協議会全国大会

中村昭夫会員

全日本プロバス協議会の全国大会が11月29日北九州市小倉にて開催されました。当日の全国各クラブからの出席者は186人、当クラブからは滝川(益)会員と中村会員の2人が出席しました。

総会に先立って理事会(常任理事及び全国ブロック代表理事16名参加)が開かれて、全国大会次第の確認および、決算・予算、事業計画の確認および次回開催の審議を行いました。

第1部総会では、事業報告、決算報告および監査報告が行われ、次年度の事業計画と予算、役員改選(前役員の継続)、次回の大会開催地(伊勢市)の審議がなされ、賛成多数にてすべて承認されました。

第2部では北九州市長による「超高齢社会を迎えて」と題した特別講演がありました。北九州市の抱える問題点(超高齢化)は多摩市とも合致しており、同市の高齢化対策は多摩市においても非常に参考になると思いました。北九州プロバスでもこれに参画して活動を行っているとのことでした。

第3部では筑前琵琶の演奏、オペラ歌手による歌曲の演奏などが行われました。

第4部では交流懇親会があり食事を共にしながら出席者同志の交流と各クラブ活動報告がなされました。

全国大会は2年毎に開催されますが何回か顔を合わせている方々もあり新たに名刺交換をした方々も多く、これらの方々と懇談でき、大変参考になることが多々あり大変有意義な集いでありました。

「忍藩と行田の足袋」 埼玉浮き城プロバスクラブ
元会長 渡邊栄一氏

忍郷友会の副会長としても活躍される氏のお話を興味深く拝聴しました。お話をもとに、忍郷友会の発展の源泉、「浮き城」のいわれ、行田の足袋について調べてみました。



☆郷土を愛し、郷土に何ができるかを問い、80名の有志で明治38年に社会活動を開始した「忍郷友会」は、何と今年111周年を迎え、現会員は200名という。

また別名「浮き城」と言われ、「のぼうの城」として映画化され有名となった忍城は、洪水の多い利根川と荒川に挟まれた関東平野の田園地帯にあり、その自然堤防を利用し、水攻めで水嵩が増しても水没しなかった。それで城が浮いているのではと攻め手の石田三成軍は恐れたという。領民の多くが籠城し大いに士気も上がったが、最終的には開城を余儀なくされた。100年に及ぶ領主成田氏の治政が農民はじめ多くの民に信頼されていたために籠城にも耐えたと言える。江戸時代は親藩、譜代の藩主を迎え、災害や幕府の普請命令などで財政的に苦しんだが、藩主に対する畏敬の念と「おらが郷土」の誇りを持っていたため、ふるさと愛にあふれた郷友会の発展につながっているのではないかな。
☆足袋の余聞…ある老舗の足袋屋が業績不振を打開するため、そのノウハウを生かしてマラソン足袋の開発に乗り出し悪戦苦闘するという行田を舞台にした小説、池井戸潤の『陸王』によれば、足袋で走った東京師範学校生 金栗四三の話が出ています。

日本が初めてオリンピックに参加した明治45年(1912年)第5回ストックホルム大会。7月14日のマラソンに出場した金栗は、日射病のため倒れてゴールできなかった。大会本部にも知られず「失踪、行方不明」という記録であった。この時履いた足袋は、学校の近くのハリマヤ足袋店と共同研究し、足袋底に自転車のゴムを貼ったものだったという。

☆その後日談…昭和42年3月21日オリンピック開催55周年を記念する式典が開催されたが、当時の記録を調べていたスウェーデンの委員会は、競技中に「失踪し行方不明」となっている金栗を記念式典でゴールさせることにし、招待状を送った。74歳 白髪の高齢者は招待を受けストックホルムへ赴き、オーバーコートを着て革靴で競技場内に用意されたゴールテープを切った。ゴールの瞬間、場内には「只今のタイムは54年8ヶ月6日5時間32分20秒3、これで第5回ストックホルム大会は総ての競技を終了しました」とのアナウンスが響いたという。そして金栗はゴール後のスピーチで「長い道のりでした。この間に孫が5人できました」とコメントしたという。(文責 鈴木泰弘)

「建築設備訪欧調査」 鈴木達夫会員

私が所属していた、大手設計事務所の空気調和・衛生設備部は、横浜西口再開発事業として、1964年12月オープンした、ザ・ダイヤモンド地下街、地上バスターミナル、地下2～5階駐車場、隣接の横浜高島屋、西口ジョイナスの複合ビルの我が国最初の大規模な地域冷暖房の設計監理に参加した。



我国はエネルギーの高度利用時代を迎え、都市エネルギーの供給システムとして、都市ガス、ヒートポンプが、新しい時代に突入しようとしていた。一方、欧州においては西ドイツが世界最大の天然ガス輸入国でありながら、電力、都市ガス、地域熱源などの供給システムを公営企業として統合されていた。

1984年9月9日から16日間におよぶ、「各種建築設備と新エネルギーに関する訪欧調査」を企画し、私が団長となり、地域冷暖房に興味を持ち、冷暖房設備で協力されたサブコン、空調メーカーを含め17名の参加のもと調査団が結成され、欧州に向かった。

- 1) 9月9日、成田新国際空港出発。
- 2) 10日、西ドイツ ハナウ市公共企業局を訪問。地域暖房を視察。
- 3) 12日、ハイデンハイム市小規模分散式熱電力供給システム視察。
- 4) 13日、シュッガルト大学視察。大学の研究の目的は暖房の実験と調査、内容として、コンピュータによる解析を主として行っている。床暖房、ラジエーター等の実験は企業の委託で新製品を実験する。シュッガルトガス会社へ表敬訪問。
- 5) 14日、スイス、チューリッヒのルンタル工場見学。15日はアルプス観光。チロルの服装の合唱団と撮影後、懇親会。そこで我々の会を「ヨッホ」会と決めた。
- 6) 17日、ボンビドーセンター訪問。建物は4ブロック。
①国立近代美術館 ②国際資料館 ③科学センター
④現代音楽研究所。空調設備の大空間はセントラル方式、個室は個別方式、冷暖房の熱源は全電気式である。
冷暖房熱源はスクリュウ冷凍機で熱回収、本装置は夜間の安い料金で冷凍機を運転し蓄熱槽に冷水を蓄熱している。
- 7) 19日、フランス セントラル病院視察。暖房システムは電気式である。パリ市内見学。
- 8) 19日～21日、モナコへ移動。公営のカジノ見学。
- 9) 21日、スペインへ、コロンブス広場、プラド美術館でエル・グレコ、ゴヤ、ラファエルを見学後。スペインの古都トレド見学。22日、フランクフルトへ移動。
- 10) 23日、フランクフルトを立ち、24日、成田国際空港着。

1. 中学生俳句大会表彰式

倉賀野武士会員



「第12回多摩市中学生俳句大会」優秀作品表彰式が2月17日に永山公民館ベルブホールで開催された。表彰式には由利審査委員長、阿部市長、清水教育長、小林多摩ロータリークラブ会長、入賞者、先生方、父兄等関係者が参加した。表彰式では、審査委員長賞をはじめ、多摩市長賞等各賞が表彰された。多摩プロバスクラブからは倉賀野会長が出席し、プロバスクラブ賞5名に表彰状と記念品を授与した。今年は市立中学校9校と都立桜の丘学園の全生徒の約94%に当たる2,854句と過去を上回る応募があった。当クラブは俳句会のメンバーと共に1次選考から最終選考まで協力した。阿部市長は挨拶で「瑞々しい感性とエネルギーに感動した。来年は正岡子規生誕150周年に当たる。これを機に俳句を学び日本の歴史と文化を身につけて欲しい」と述べられた。

最優秀句「審査委員長賞」は

「四階の教室の窓午後の虹」 諏訪中学校 古賀俊介
なお、「東京多摩プロバスクラブ賞」として以下の5句を選び表彰した。

見上げれば祖父思い出す夏の雲 落合中学校 八木琴子	千本の鳥居を覆う若葉かな 多摩永山中学校 水谷由紀	清水の舞台へ泳ぐいわし雲 鶴巻中学校 岸本彩奈	千本の鳥居のすきま秋の風 鶴巻中学校 木村夏子	風鈴が小さな風に触れている 鶴巻中学校 林優紀	東京多摩プロバスクラブ賞
------------------------------	------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------

なお、1次選考を通過した作品は、1月19日～24日の間、京王聖蹟桜ヶ丘店5階AB館連絡ブリッジギャラリーに展示される予定。

2. 多摩地区3PC交流ゴルフコンペ 北村克彦会員

10月28日(金)GMG八王子ゴルフ場で開催された。

参加者は八王子5名(途中リタイア1名)、日野7名、多

摩4名、計16名。会員の高齢化によるものか、これまで一番少ないのではないだろうか。

このコースは交流コンペとしては初めてのコースだが、ホールごとに、「天狗の鼻」「片思い」「魔女の森」などユニークなニックネームがつけられていて、面白い。

メンバーそれぞれが和気あいあいと楽しみ、交流の良い機会になった。成績は八王子が上位3位までを占め、多摩は4、5位に入った。

終了後の表彰式・懇親会の席上、前回ホールインワンを達成した北村会員に記念品の贈呈があった。来年度の幹事は多摩です。



3. 忘年会

秋山正仁研修・親睦委員長

12月7日(水)午後5時より市内京王クラブで立食パーティー形式で開催。会の冒頭、倉賀野会長は「本日の定例会は150回の記念すべき会で、その後こうして9名もの来賓を賜り、真に有難うございます」と挨拶。引き続き来賓の挨拶と紹介があった。ご来賓の方々は、東京多摩ロータリークラブより小林会長・飯島幹事、東京八王子プロバスクラブより岩島会長・飯田幹事・浅川交流担当・立川全日本プロバス協議会副会長・杉山元会長、東京日野プロバスクラブより小島会長・小西副会長各位で「このような楽しい交流会にお招きいただきありがとうございます」との挨拶があった。

西村副会長の乾杯音頭の後、懇親に移り、数名のお客様から忘年会に対してのスピーチを頂きました。

後半にはカラオケもありと盛り上がった忘年会で、何人かの方々より「近年に無い楽しい忘年会をありがとう!」と……。中締めは大澤総務委員長にお願いし、無事終了した。



1. 出前講座「江戸しぐさ」

滝川道子会員

今年も多摩中一年生 150 名への礼儀作法の講習の要請があり、11 月 10 日(木)お伺いしました。「礼儀作法は思いやり、ありがたうは奇跡の言葉」との題で話をさせていただきました。後半に「正しい姿勢・お辞儀・歩き方」の実技を取り入れました。歩き方は姿勢の基本であり、背筋を伸ばして一本の線の上を歩くつもり。希望者にお手伝いいただき、本を頭に乘せて歩いてもらいました。姿勢が悪いとすぐに本が落ちてしまいます。爆笑の中での歩行練習。お辞儀は必ず相手の目を視て挨拶をしてから頭を下げる「礼三息」「残心」という作法を……、頭を上げてから、又もう一度相手の目を視ることの大切さ。“私のことを確かに受け止めてくれた”との喜びが残ることを知っていただきました。生徒さんたちと一体になったような楽しい授業でした。

2. 多摩市民茶会

森川静子会員



旧年 10 月 23 日
(日) 多摩市民茶会で薄茶席を森川会員が席主となり、200 名の来客をもてなした。

当日は市長も来席され、和やかな席になった。この会で特筆すべきは、学校茶道で森川会員が指導している都立府中工業高校の生徒が校外活動として三名参加したことです。生徒にとっては校外での初舞台となり、日頃の稽古の成果を発表する良い機会となった。男子数の多い工業高校に茶道部を設け、和室・水屋にも力を入れ、積極的に協力する学校の教育方針には敬意を表したい。制服姿のお点前・お運びも珍しく、皆の心が和んだ。(阪東熙子記)

3. おもてなし語学ボランティア養成講座

中村昭夫会員

オリンピック招致プレゼンテーションにおいて、滝川クリステルさんが、東京ではおもてなしの心をもって外国の方々をお迎えしたいと表明し、2020 年のオリンピックが東京に決まりました。東京都では都民に対して「おもてなしの心」を学んでもらうために“おもてなし語学ボランティア”を 35,000 人育成したいとして、都内各区・市に対し講座開催の要請を行った。多摩市ではこれを受けて、多摩市国際交流センター(以下 TIC)に対し講座開催を推進するよう指示を出した。

このような経緯で TIC では、旧年 4 月より活動を開始し講座を開設、受講生を公募した。第一回目は 120 名、第二回目は 140 名の申し込みがあり、毎回 24 名の枠を大幅に超え、関心の高さを痛感したところです。

会場は関戸公民館を初めとしたコミセンを活用。また、市の職員有志にもということで、予定を組んでおり、本年

3 月までに約 150 名を育成し、更に 2019 年までには 600 名近い語学ボランティアを育成する計画である。

受講料は無料、一講座 10 時間(2H×5 回)、講師は都から派遣、テキストも都から支給される。講座の進め方は、4 人一组での英会話指導とおもてなし授業では、道案内や買い物のお手伝い、そして日本のマナーなどに関してグループ討議を行い、それを発表するという形である。

多摩市では現在、オリンピック実行委員会で審議中の様々なイベントや多摩市内の名所めぐりなどの行事にこの講座の卒業生を活用していく計画である。

4. 全陶展入選

上田清会員

恒例となった全陶展が 11 月中旬に東京都美術館で開催され、小生も「信楽窯変壺」を出品させていただきました。

この作品(高さ 25 cm、径 33 cm)



は埼玉県境の狭山丘陵にある登り窯で、陶芸仲間と約 2 週間かけて焼いた数百点の中の 1 つで、私にとっては思い出深いものとなっています。特徴としては長時間にわたって降り注いだ松灰によって偶然生じた「窯変」が景色となり命となっていて、約 1,300 度に達した炎の魔力・魔性によって創りだされたものと言えます。また作品の良し悪しは別として、今年も文化の殿堂ともいえる上野の森で、心地良い秋の風に吹かれながら過ごすことができた至福の時間に感謝している所です。

<阪東会員の鑑賞記>

全陶展の入選者は全国から 318 名におよび出品多く、先ず見つけて思わず顔が綻ぶ。“温かくだらか” 信楽なのに、そんな表情を見せている。素人の私だが、素地の伸び難く、又石爆ぜも多く手を切ることもあるのに、よく上へ上へと伸ばし、薄作りなので、技がすごいと思った。壺の「おなか」が膨らみ、仙厓の描く布袋さんがポカンと口を開けているように福々しい。

係に頼み触らせてもらった。轆轤目細かくくつきり、白い細かい爆ぜもきれいで、肩から二重に利休壁色の釉が厚みよく流れ、壺の裾の火色が胴体と違った朱の発色と見所沢山の作品だ。成型は自力だが、乾かし窯入れの後は火の神ぞ知る領域に委ねるしか無し。火入れは、初め頼むぞと念を込めて投げ入れる内に、やがて燃え盛る人の及ばぬ火焰に変わり出すと、無心となり、只リズム良く松の薪を手に取り神の僕になって終わる。長身の上田会員の背をこごめた姿を想像し、私は想いを熱くする。煩惱の薄れ神に委ねて、焚口を閉じると、清々しい気分になると聞く(上田さんの名は“清”さん)。窯出しまあまかかと抱えて出し、じっくり見て「ウーんうまういった!」と安堵したことだろう。今一度拝見したい。

棟梁とのキャッチボール

増山敏夫会員

野球の話に非ず、建築の話。越中八尾は格子の街並みの美しい町である。この町で町屋を設計した。オーナーは八尾出身の女優、彼女の案内で町屋の住まい方の具体的な知恵を学習した。八尾の棟梁が刻み、組む本格的な家造りで建てる。むろん釘を使わない。継手・仕口という加工の技だけで組む。この地方の民家の伝統に倣い本漆を塗る。竣工まで3年、度々の八尾通いは楽しいものだった。



梁と柱を組む鼻栓と込み栓

町屋としては大きい、間口4間×奥行17間の敷地に、表は接客用の町屋、坪庭を挟んで奥が住まい。私の狙いは匠の技を魅力的な空間として未来へ繋げること。具体的には「消失の運命にある匠の遺産の再生」と「伝統的町並みにつき合う説得力ある提案」である。

丁度、旧友の昭和初期の住宅が壊されることになり、建具20枚余りと欄間を、新しいインテリアとしてここで再生させた。江戸職人の逸品である。また玄関にはここで解体された蔵の大戸を、接客用の座敷にはここにあった小座敷廻りの意匠が再生されている。違い棚の天地の小襖には業平と思しき人物の大和絵が描かれ、裏に大正十五年絵師〇〇とあった。この二間つづきの客間には先の江戸職人の障子と簀戸が活かされている。



蔵の大戸を玄関に

街並みに付き合うために…格子の意匠だけでなく、2階の高さと軒の高さを低く抑えたい。建替えられた殆どの町屋が2階が高過ぎて参考にならない。幸い隣の江戸時代から続く老舗旅館の寸法関係が良いモデルになった。しかし表の皮だけ倣っても中身が伴わねば使いものにならない。2階を低く抑える意味は「風の盆」の流しと「曳山」を観る高さが普通の2階では高過ぎるのである。殊に曳山の屋台には神の依代役がお載りになる。見下してはいけない。そこで低い中2階を通り側全面に設ける案を考えた。

ラフスケッチが出来た段階で棟梁とのキャッチボールが始まった。木組みの相談である。どう支え、どう空間を覆うか、このやりとりが欠かせない。骨組みが大事なデザ

インなのである。「ここを一段ずらしてあげられないか」「ではこうしよう」「ここは5寸低く」など、キャッチボールを繰り返すことになる。「先生、此处はこうした方がよい」、直球、変化球、初めは荒れ球もコントロールが定まってくる……こうしてベストな空間の形が生れる。決して一方通行ではない。緻密な棟梁との協同作業が上手く行った時、初めて良い建築になるのである。結果、互いに認め合える出来栄に至る。

嬉しいことに、担当の若棟梁が自分の最高の仕事になったと言ってくれた。次世代を担う棟梁と思う。

◇◇◇ ハッピーバースデー ◇◇◇

11月誕生日を迎え
られました！

左から 倉賀野武士会員
村上伸茲会員



◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

小泉純一郎元首相が現役の頃“人生には三つの坂があり、上り坂と下り坂、そして三つ目がまさかである”と喝破された。まさに平成28年こそ世界的規模でのまさかの連続であった。米国大統領選挙でのトランプ候補の大逆転、さらに英国のEUからの離脱という二大まさかが全世界を震撼させた。

さて、今年はどんな年か。干支では、今年は丁酉（ひのととり）が運気をとりこむとかで縁起の良い一年とされている。当クラブも新年にふさわしく素晴らしい70号をお届けすることができた。

○今回、友好クラブである浮き城プロバスクラブとの卓話の交換で遠路来場された渡邊栄一元会長の、行田市にまつわる歴史、産業についてのスピーチから、歴史の浅い多摩市とは違う風土の重厚さを感じさせられた。

○早くから陶芸に精進された上田清会員が、此の度更に大きな飛躍を遂げ、登り窯に挑戦した力作“信楽窯変壺”が全陶展に入選を果たされたことは誠に御同慶の至りである。この作品を実際に会場で手にした阪東会員が、その高い見識から愛情の籠った賛辞を呈されたのが一段と目を引いた。○我国の木造伝統工法の家づくりに一家言を持つ増山敏夫会員が“棟梁とのキャッチボール”の素晴らしい寄稿文を寄せられた。

風の盆の哀愁ただよう越中八尾を舞台にして独特の家づくりを進め、また木組み芸術の粋を駆使して棟梁と渡り合われた三年間のご苦労を慮るとき、まるで一卷の映画を見るような高揚感に引き込まれた。是非一度その町屋を拝見したいものである。（広報委員 平田哲郎会員記）